

定時制高校からのメッセージ

—教育目標・評価論の社会的課題を探る—

小 林 千枝子

1. 課題と方法

定時制高校とは、正確には高等学校定時制課程のことである。小論は、この定時制高校に関するドキュメントや小説、実践記録等を手がかりにして、現代日本の教育目標・評価研究を深める視点を探ることを課題としている。定時制高校のあり方は、社会の労働や教育の現実、貧困の度合いなどを反映してきている。小中学校時代に不登校であった者が定時制高校に進んで、改めて学校体験をするというケースも少なくない¹⁾。こうした定時制高校の現状を手がかりにして教育目標・評価の再検討をすることは、教室のなかだけではみえにくい教育をめぐる社会的な矛盾や現実、それからもたらされる課題を浮かび上がらせてくれるだろう。ドキュメント、小説、実践記録等を取り上げるのは、それらが、定時制高校を実際に生きた人々の現実を映し出しているとの判断による。

現代の定時制高校は、大きくは、高校間の学力格差を反映したピラミッド構造の底辺部分に位置づいており、後期中等教育のセーフティ・ネットの役割を果たしている。その一方で、少子化の影響か、あるいは全日制課程中退者の新しい受け皿を提供するためか、統廃合が進みながらも、単位制、多部制、さらにはフレキシブルな通学が可能なチャレンジスクールといった新しいタイプの定時制高校もつくられてきている。

定時制高校を取り上げた、あるいは定時制高校に言及した書籍を収集をしてみた。134～135頁の表が、古書店等もあたって収集し得た書籍のリストである。これら書籍の存在については、国会図書館の検索機能を手がかりにした。刊行された単行本のすべてを収集することはできなかったが、かなりの部分を含んでいる。書物となった記録以外にも雑誌等まであたれば多数のドキュメント類を収集することができる。その点で、限られた情報による考察ではあるが、それでも表にみられるように相当量の冊数になる。

小論は、まずはじめに、先行研究を手がかりにしながら定時制高校の制度面や学校数、生徒数などの変遷を確認する。そのうえで、これら収集したドキュメント等を通して、定時制高校が、定時制高校に在籍した者やここで教師を勤めた者たちにとってどのようなものだったのかを考察する。続いて、このうち、複数の書籍を刊行している兵庫県西宮市立西宮西高校定時制の英語教師、脇浜義明の独特の教育論と、神戸工業高校定時制の国語教師、南悟の短歌指導、教師と生徒と保護者と卒業生とで四者協議会をつくって学校づくり

表 定時制高校についてのドキュメントや実践記録、小説等（単行本に限る）

NO	編著者	表題	発行年月	出版社	内容
1	宮村 堅弥	霧は晴れた り	1957.7	洋々社	小説。新潟県の山奥に定時制分校を定着させた教師の情熱と実践。
2	高塚 暁	定時制	1960.1	三一書房	勤労青少年教育の現状と問題点。
3	江面 幸子	私	1960.5	学風社	定時制女子高校生の手記。
4	愛知県高教組 定通部	風さわぐ野 の花	1975.6	高 校 生 文 化研究会	愛知県の昼間二交代定時制について、各種統計や生徒や教師の生活記録等で描く。
5	首藤 隆治	働き学ぶ生 徒と教師	1981.8	明治図書	新潟県立三条高校定時制高校教師の実践記録。これからの定時制を「国民教育のとりで」と位置づける。
6	村山 隆	たにし学校	1986.10	あゆみ出 版	京都府立北桑田高校昼間定時制美山分校設立に向けての地域住民の動きと設立後の教育実践。
7	佐々木 賢	当節定時制 高校事情	1987.8	有斐閣	著者が定時制高校教師として出会ってきた生徒たちの様子。初出は1982～1986年。
8	富山 芳幸	未完の学校 改革	1988.12	教 育 史 料 出版会	三重県の昼間二交代定時制高校の生徒会活動の記録。
9	南 悟	定時制高校 青春の歌	1994.7	岩 波 ブ ッ クレット	働き学ぶ定時制高校生徒たちの短歌とその指導実践。
10	後藤 正治	リターンマ ッチ	1994.11	文芸春秋	兵庫県西宮市立西宮西高校定時制のボクシング部に集まった生徒たちや教師たちのドキュメント。大宅壮一ノンフィクション賞受賞。
11	脇浜 義明	ボクシング に賭ける	1996.10	岩波書店	兵庫県西宮市立西宮西高校定時制のボクシング部を中心にした「アカンタレと夜学教師の日々」を描いた記録。
12	川守田正康	北斗の操学 ばずや	1999.11	旭 図 書 刊 行 セ ン タ ー	戦後初期、樺太から北海道に引き上げてきた著者は1951年、18歳のときに札幌南高校定時制に入学し、4年後に卒業した。「わが原点は定時制」ともいう定時制時代の生活を綴る。
13	石井 智	僕が通った 定時制高校	1999.11	朱鳥社	小中学校時代に遅刻常習者であったという著者が通った定時制高校の全体像。
14	脇浜 義明	教育困難校 の可能性	1999.12	岩波書店	兵庫県西宮市立西宮西高校定時制のボクシング部顧問教師の実践および教育論。
15	八寛 正大	夜光の時計	2000.3	新読書社	定時制高校教師として出会った様々な生徒たちの実像を描く。
16	南 悟	ニッカボッ カの歌	2000.5	解 放 出 版 社	定時制高校における短歌指導の実際と作品の背景にある生徒たちの生活を描く。作品例「仮枠のパネルに向かいクギを打つ桃色ニッカが朝日に映える」。
17	水谷 薫	立ち止まる 勇気と駆け 出す希望	2001.8	近 代 文 芸 社	妻、母として働いてきた著者が、44歳のときに定時制高校に入学し、卒業するまでの4年間を描いたドキュメント。

NO	編著者	表題	発行年月	出版社	内容
18	後藤 正治	リターンマッ ッチ	2001.9	文芸文庫	1994 年発行の同名の書に「番外編」や「解説」を付して文庫本として復刊。
19	大橋 松行	蛭雪の学び 舎・癒しの学 び舎	2003.3	サンライ ズ出版	1983 年 4 月から 1995 年 3 月まで定時制高校の教師を勤めていた著者の、実践と定時制をめぐる動向を統計資料も含めて論じている。
20	佐藤 晃一	ああ、定時制 高校	2003.6	新風社	小説。戦後初期の、定時制高校入学を夢みて励んだ青年を描いている。
21	室谷 光彦編	教育はどこ へ行く？	2004.2	遊タイム 出版	大阪府の府立夜間定時制削減に反対し、存続を求めた人々の記録。編者は 1965 年に府立北野高校定時制を卒業。
22	浦和商業高校 定時制四者協 議会	この学校が オレを変えた	2004.6	ふきのと う書房	埼玉県立浦和商業高校定時制課程の実践を、生徒、卒業生、保護者、教師たちが語る。
23	北河いつき	一色高校定 時制	2004.9	集英社	マーガレットコミックス。定時制の様子を描いた少女漫画。著者は定時制の教師経験あり。
24	石垣 用喜	石垣島物語	2006.1	文芸書房	短編小説集。1960 年代初頭の大阪府の定時制高校の生徒を主人公とする「定時制高校」を収録。
25	宮本 延春	オール 1 の 落ちこぼれ、 教師になる	2006.7	角川書店	小中学校を「落ちこぼれ」で過ごした著者が、アインシュタインについての TV 番組との出会いを機に数学に関心を持ち、定時制高校、大学、大学院を経て高校の数学教師になるまでを描く。
26	手嶋 純	格差社会に 揺れる定時 制高校	2007.9	彩流社	定時制高校の教師でもあった著者の体験とスロースクールとしての定時制の存在意義を説く。
27	平野和弘編	オレたちの 学校浦商定 時制	2008.3	草土文化	2008 年 3 月をもって閉校となった埼玉県立浦和商業高校定時制課程の実践。元生徒たちも多くを書いている。
28	兵庫県立長 田商業高校 創立 80 周年 記念事業実 行委員会	格差社会へ の高校現場 の挑戦	2009.3	学事出版	兵庫県立長田商業高校定時制の教育実践全般。
29	瀬川 正仁	若者たち	2009.6	バジリコ	副題「夜間定時制高校から見えるニッポン」。ドキュメント。
30	宮本 延春	オール 1 の 落ちこぼ れ、教師に なる	2010.7	角川文庫	2006 年発行の同書の文庫本化。著者には『逆境力』（主婦と生活社、2008 年）もある。

（2012 年、小林千枝子作成）

に励んだ埼玉県立浦和商业高校定時制の教育実践に注目し、その教育目標や評価を検討する。この三者をとくに取り上げるのは、脇浜の実践についてはTV放送による報道もされており、社会的にインパクトがあったことに注目した。他の場合についても、複数の書籍刊行にみられるように社会的に公表が要望された、そうでなくとも当事者の公表に対する強い要求があった記録とみられる。それゆえに一定の情報を書物によって得られることも取り上げる理由である。

なお、定時制高校についての先行研究は多数にのぼるが、とくに教育目標・評価に焦点をあてた研究は、管見の限りみあたらない。

2. 先行研究と定時制高校史概観

(1) 定時制高校の発足

定時制高校は、1948年の新制高校発足時に、教育の機会均等を推進するものとして発足した。周知のように新制高校は総合制・小学区制・男女共学という三原則のもとに成立した。ところが、ここにもう一つ、全定一元化というべき原則も存在していた。すなわち、文部省学校教育局による『新学校制度実施準備の案内』（1947年2月）に次の文言が含まれていたのである。

定時制は、教員の点においても教育の程度においても全日制と同一基準に置かれるのであるから、生徒も原則的には全日制と同一基準で学習すべきである。従って、卒業資格も全日制のものと原則的には同一であるべきであるが、修業年限は全日制よりも長くなるであろう²⁾。

板橋文夫らは、この全定一元化も含めた高校四原則が採用されていたことに注目している³⁾。なお、定時制の修業年限は、1950年の学校教育法一部改正により4年以上となる。通信制課程は定時制課程と同時に発足したが、当初は受けられる科目も取得できる単位も限定されていた。通信制課程だけで卒業できるようになるのは、1955年4月の文部次官通達「高等学校通信教育の実施科目の拡充ならびに同通信教育による卒業について」以後である⁴⁾。

定時制高校の制度的前身は青年学校と夜間中学であったとされる⁵⁾。青年学校は1935年に12歳以上19歳未満の男子勤労青年に義務化されたもので、夜間中学は戦前においては正規の中学校とは区別されて実業学校として扱われていた。前記『新学校制度実施準備の案内』にも「定時制の設置とともに、現在の青年学校本科は廃止されることになる」とある。ただし、青年学校の教員が定時制高校の教員に移行したわけではない点などに注目して、青年学校が新制定時制高校に移行したとはいいたいとする研究もある⁶⁾。

新制高校全日制課程は多くの場合、その校舎や教員を、戦前の中学校や高等女学校を引き継いで成立した。定時制はそれに併置するものとされたのである。その形態としては、

当初は「夜間において授業を行う課程」（夜間定時制）と「特別の時期及び時間において授業を行う課程」（昼間定時制）が設けられた。1953年の学校教育法施行規則一部改正により全日制にも分校が設置可能となったが、それまでは定時制にしか分校設置は認められていなかった。

（２）昼間定時制分校の盛衰

新制高校発足の当初は、公立高校の昼間定時制分校が多数開設された。農繁期には家業を手伝い、農閑期に集中して授業を行う昼間定時制分校は、農山村においてはまことに都合のよい高校だったのである。とりわけ高度成長期に入る前の1950年代前半には、農繁期以外には働く場もなく農村に滞留していた農家二三男にとって、教養や技術を習得する格好の教育機関となったと思われる⁷⁾。実際、世論も大きくこれを支持した。次は1948年4月1日付の『朝日新聞』社説「新制高校の発足に望む」の一節である。

昼間働くもののための夜間高校ではなく、夜間にも進学出来ぬもののために、特別の時期、季節をえらんで授業を行うこの定時制高校は、農閑期を利用してその学びたいと思う学科の単位をえらんで修める便宜を与える点において、とくに地方農山漁村の青年層に対する画期的な教育制度といえよう⁸⁾

定時制分校は、とくに公立校での設置が目覚ましく、1951年には私立2校を合わせて1,508校となった。そのため、分校を含む国公私立の学校数をみると、新制高校発足後しばらくは全日制よりも定時制の方が多く、両者の比率がほぼ50%ずつになったのは1957年であった。このとき全日制のみの高校が1,532校、定時制のみの高校が1,533校、併置校が1,512校であった。この年の定時制のみの高校のうち1,173校が分校である。これ以後は逆転して定時制は減少し続けた⁹⁾。

定時制高校減少の一因に、設備面の不備があった。とくに分校については、中学校や公民館の間借りといった例が珍しくなかった。分校数は1951年をピークとして急速に減少した。不備を補ってよりよい分校にするよりも廃止へと向かったその背景には、1955年制定の地方財政再建促進特別措置法があった。この法律は、赤字団体となった市町村が他の地方公共団体に寄付金を支出しようとする場合は、あらかじめ自治庁長官の承認を得なければならない、というものである。どういうことかということ、都道府県立高校の分校は当然ながら設置者は都道府県である。しかし、運営費を、分校を置く市町村に依存していたのである。逆にいえば、市町村は分校の設置・維持にそれだけ熱心だったのである。この法律制定以後、この市町村による分校維持費の出費には条件がつくことになり容易ではなくなった、というわけである¹⁰⁾。

また、昼間定時制分校には、中学校卒業後、経済的にとくに働く必要がなくとも地理的

事情ゆえに本校に通えないという者も入学してきていた。そして分校は、全日制にも分校が設置されるようになった1953年以後、全日制分校あるいは独立校へと移行する動きを示した。こうして、高校教育の普及に大きな役割を果たした昼間定時制は急速に減少し、夜間定時制が定時制の主流となっていく¹¹⁾。

高度成長期に集中的に設置された定時制に昼間二交代定時制というものがある。繊維産業の二交代制勤務に合わせて設置された二交代制の定時制で、変則型の昼間定時制というべきものである。具体的は、早朝の5時から勤務する週は午後2時半から授業がはじまり、午後1時半から夜の10時まで勤務する週は午前中の8時半から授業がはじまる。生徒たちは、こうした生活を一週間おきに送るのである。1960年代に繊維産業が盛んな地域に設置され、日本における繊維産業の盛衰と命運を共にした定時制といえる¹²⁾。表4番の『風さわぐ野の花』はこの昼間二交代定時制の実態を示す記録である。片岡栄美は、昼間定時制を農村型、夜間定時制を都市型、昼間二交代定時制のように地方都市にあって地元の中小企業と密接に結びついて成立した定時制を地方都市型と分類している¹³⁾。

(3) 多様化政策と技能連携制度

高度成長期には経済界の意向を反映させて高校教育の多様化を進める教育政策がとられた。経済界の技術革新に応じるべく1962年に高等専門学校が発足し、工業高校も増設された。高校の教育課程に類型が設けられて、実用的で平易な学習をする高校・学科と系統的でアカデミックな学習をする高校・学科とができた。秘書科、森林土木科、電気工作科等々の新しい職業学科が多数設置され、その一方に理数科というエリート養成学科も設置可能となった¹⁴⁾。六三三四制の単線型学校階梯が切り崩され、また、同じ高校教育とはいえ教育内容は多様であるということになり、高校間の教育格差が政策的に大きく助長されることになったのである。

高校教育多様化政策の一環として、1961年に技能連携制度が導入された。この制度が定時制や通信制のあり方に大きく影響した。技能連携とは、高校以外の教育訓練施設で学習したものを高校の単位として認定するというものである。発足当初は連携施設について、年間800時間、3年間、高校教員の資格所有の指導員が半数を占めるといった条件を満たさねばならなかった。そのため連携施設は少数にとどまっていた。しかし、1967年の改正により連携施設の条件が大きく緩和されて、年間680時間、1年間となった。連携できる科目、単位数も拡大した。年間680時間の学習は各種学校の規定と同じで、高校教員の資格と無縁な指導員を有する各種学校の教育がそのまま高校の単位として認定されることになった。その結果、連携施設も連携高校も急速に増えて、1969年度には226の施設が53の高校と連携していた。連携施設の7割が教育期間1年の各種学校か2年の准看護婦養成機関で、高校の方は75%が通信制だったという¹⁵⁾。

こうしたとき、その存在を大きくしていったのが、全国あるいは3つ以上の都道府県の区域を対象とする広域通信制の私立高校である。1977年5月時点で次の5校が設置されていた。1963年発足の日本放送協会学園高校、1964年発足の科学技術学園高校、1967年発足の向陽台高校、1968年発足の九州商業高校、1975年発足の東海大学附属望星高校¹⁶⁾。企業や事業所、病院等は、通信制で高校教育も受けられることを謳い文句にして中卒労働者を募集し雇用する、労働者かつ高校生となった者は連携制度を利用して最初の1～2年目に各種学校中心の学習により技能を習得し、続いて通信教育により高校の卒業資格を取得する、というシステムである。たとえば工業高校であれば、理論的な学習を経て実習に入るというのが通常の教育課程なのだが、連携制度を利用した連携教育においては、連携施設での実習をはじめに行うケースが多かったようである。一定の技能を習得すればそれだけ労働者として有能になるという企業の意向を反映していたといえよう。連携施設が准看護婦養成機関であれば、ここを修了すれば看護婦資格をもてるようになるため、夜勤も可能になる。よって高校3年目は准看護婦として夜勤もこなしながら定時制あるいは通信制の高校教育を受けるという事態になる。通信制の場合、修学を続けるかどうかは本人の努力に依存するところが多い。そのため労働者としての生活に重きがおかれれば、結果的に中退せざるを得なくなる。定時制の場合、連携教育の生徒にだけ特別のカリキュラムを要するため、他の定時制生徒との交流が難しく、教科外活動も不十分にならざるを得ないという問題もあった¹⁷⁾。

先述の昼間二交代定時制は企業の要請で設置されたし、企業は昼間の高校に通えることを謳い文句にして中卒労働者を募集していた。その点で産学連携が促進された高度成長期の所産であるし、高校教育多様化政策の一端を担ったものである。しかし、企業が高校の教育内容に直接関与することはなかった。その点で連携教育とは異なる。連携教育とは、高校が高校以外の教育機関での学習を高校教育として認定することだからである。

なお、技能連携制度は、今日、不登校生徒などに実質的な高校教育を提供する専門学校が、高校と連携することで高校卒業資格を取得させるものとして機能している。この場合、生徒は実際には技能連携校に通学して学習するのだが、高校にも籍をおく。

技能連携制度は、定時制および通信制が、その教育内容面で、学校教育としてのある種の厳格さを大きく減じさせることをもたらした。1978年の学習指導要領改訂はその傾向をさらに促進させた。「実務等による職業科目の履修の一部代替」が認められたことにより、家事労働や実際の勤労を家庭科や職業科目に代替させることが可能となったのである。続いて臨時教育審議会答申によって6年制中等学校と単位制高校が提案されたのちの1988年3月、「単位制高等学校教育規定」が公布された。これにより通通併修、定通併修、定定併修といった、他校で履修したものを卒業単位に加算することができるようになった。修業年限も3年以上に改められた¹⁸⁾。ここにおいて定時制高校は、働きながら学ぶ高校という

旧来の定時制高校像を、制度面でもはっきりと脱皮するものとなったといえよう。

（４）生徒数と社会的役割の変化

生徒数をみると、定時制課程の生徒数がピークに達するのは1953年で、577,162人、高校生全体の22.8%であった。その後1960年までは51万～55万人台を保った。定時制生徒数が減少に転ずるのは1967年で、このとき479,248人、高校生全体の10%となった¹⁹⁾。高校進学率が90%を超えるのはオイルショック後の1974年である。高度成長期を通して高校進学率は上昇し続けた。それとともに定時制高校の統廃合が進められて、定時制課程をもつ高校数も定時制の生徒数も著しく減少していった。

片岡栄美はこの生徒数の変化に注目して、定時制高校発足後1953年までを「発展期」、1953～1965年を「維持期」、1965年以後を「衰退期」と名づけて、大規模な質問紙票調査とSSM調査をもとに、定時制生徒の特徴がどのように変わり、変わらないのはどのような点かを明らかにしている²⁰⁾。それによると、定時制には全期を通じて、経済的に恵まれない家庭出身の生徒が少なくない。このことから低所得階層の子弟に対する高校教育拡大という定時制本来の役割には依然大きいものと片岡はいう。一方、学力面では時期により違いが明瞭である。自己判断による中学時代の成績が、上および中の上の者が、発展期68.9%、維持期58.1%、衰退期23.1%である。卒業後の職業（初職）についても、事務職は発展期31.3%、維持期17.3%、衰退期10%と、大きく減少している。逆にブルーカラー職は発展期69.7%、維持期71.7%、衰退期83.6%と増加傾向を示している。ただし、発展期においては、専門・管理職といったいわゆる上層ホワイトカラー職に初職として就くには全日制に比べれば不利な立場にあったが、その後の転職状況までみれば、全日制卒と同等かそれ以上であった。それだけ発展期の定時制生徒が強い学習意欲をもっていたといえよう。しかし、維持期以降、定時制卒のブルーカラー化が急速に進行した。片岡は「戦後の教育機会拡大の流れの中で、定時制高校は、学力水準の低下に示されるような生徒層の質的変容や労働市場の就職差別等の問題をかかえることによって、教育の平等に寄与するというよりもむしろ階層再生産の機能を強めながら変容をとげてきたと思われる」とまとめている。

勤労青少年の教育機関としての定時制や通信制の社会的役割が大きく変化するの、片岡のいう衰退期のなかでも、高校教育が準義務教育化した1970年代半ばからではないかと筆者はみている。1980年代後半のある報告書には「石油ショック以後、定通制生徒の様変わりが始まった」、「かつての勤労生徒のように学習意欲に富んだ生徒ではなく、仕方なく来ているような生徒が目立つようになった。したがって、基礎学力の低下、自主活動の停滞、欠席・遅刻の増加など基本的生活習慣の乱れも顕著となり、手のかかる生徒が増えた」²¹⁾とある。定時制高校の変化を1970年代半ばとみるのは、このような見解が一定の支持を得

るだろうとの判断による。いずれにしても、学力格差を反映した教育困難校としての定時制というイメージは、この延長上にある。そして1990年代を迎えるころ、事態はさらに深刻になる。表の30番の『若者たち』の著者は、1990年代になってから定時制高校に変化の兆しがみえはじめ、「心の傷を抱えた子どもたちの居場所」の役割を担うようになってきたと語っている。27番の『格差社会に揺れる定時制高校』には、「さまざまに傷ついた青少年がたどりつく、いわば教育の野戦病院であった」、「定時制は定時制独自で存在するのではなく、まさにこの社会の諸問題をかかえながら存在している」とある。

3. 定時制高校をめぐる言説の変遷

(1) 働きながら学ぶ高校生の原型

表1番の『霧は晴れたり』は、新潟県の山奥に昼間定時制分校主任として赴任した主人公が、妻とともに分校存続のために奔走する姿を描いた小説である。開校は1948年9月。主人公は「よそ者」扱いされ、小学生の娘が意地悪されながらも、ついに村民の理解を得て、第一回卒業式を挙行するまでになった経緯を詳細に描いている。開校から9年後「分校は、生徒数九十八名、出席率九十七%、どの部落からも、来ていない部落がないという、しっかりした地盤を築いていた。卒業生も六回約百名を送り出し、彼等は青年団、4Hクラブ等の幹部や指導者となり、文化、産業発展の中核となって活躍していた」²²⁾。小説から実態をそのまま伝えているわけではないが、戦後初期の昼間定時制分校が地域のリーダー育成を担っていたことがうかがわれる。

刊行は2000年以後だが、20番の『ああ、定時制高校』も戦後初期の定時制高校生像を示す小説である。種々の事情から働いて家族を支えねばならない勉強好きの青年が、定時制高校に進学できることを知り、たとえ何年かかっても定時制に行くのだと、それを励みに勤労にも地域の青年活動にも励んでいる。定時制高校は学問の場であり、真面目で勉強好きの者が入学するところと考えられていたことがうかがわれる。24番の『石垣島物語』所収の「定時制高校」は、1960年代初頭の定時制高校生を描いた小説である。主人公の青年は、勤労青年でもあるが、労働者というよりも高校生であると意識しているし、周囲もそうみている。『ああ、定時制高校』も『石垣島物語』も定時制高校の統廃合が進む2000年代に刊行されているのも興味深い。強烈な学習意欲を秘めながら働く定時制高校生像を、暗に現代に提示しようとしているように思われる。

12番の『北斗の操学ばずや』は、1999年刊行だが、副題に「札幌南高等学校定時制の追憶」とあり、戦後初期の夜間定時制高校時代を中心に綴ったエッセイである。表題の「北斗の操学ばずや」の表現は、定時制の担任教師が作詞・作曲した学級歌からとったものである。卒業後毎年クラス会を行い、学級歌を歌い続けてきたという。8時間の肉体労働の後に3時間半の夜学での勉強はつらくもあったが、教師や級友との濃密な人間関係に支えられて卒

業できたという。卒業できたのは半数から三分の二程度だったとも書いている。著者は卒業後、夜間短大から北海道大学に編入学している。

3番の『私』の著者は、茨城県水戸市の夜間定時制の3年生である。同書は詩を中心に友人への手紙やエッセイ、夏目漱石の『こころ』を論じた論考等を収録している。副題に「定時制女子高校生の手記」とある。著者は、1959年9月の伊勢湾台風の被災者に、一ヶ月の小遣いをビスケットや学用品に代えて送った。そのときの著者の思いが「貧しくとも被災者へ贈り物」と題して『朝日新聞』の「ひととき」欄に載ったことから、詩集発行、ついで同書の刊行となったという。次は同書に収められたその一文の一節である。「私は、働きながら学ぶ貧しい学徒です。朝早くから夕方まで精いっぱい働き、疲れきって黒板をみつめる、そんな私の生活では、人を助けたいと願うほうが無理なのかも知れません」、「いくら貧しくとも両親がそろい、兄弟が顔をならべている家庭のなかでは、くじけることも、みじめだということも知りませんでした。でも、苦しかったのです」、「その苦しさを知っていればこそ、力のない私自身がはがゆくて仕方がないのです。被災者のみなさん、最後までがんばって下さい」²³⁾。貧しいがゆえに全日制ではなく定時制に進学したのだが、彼女にとって定時制は学問の場であり、学問を通して自分を豊かにしてくれるところだったのである。

(2) 中卒労働者募集や連携教育のなかでの定時制

1970～80年代に刊行された4～8番の5冊には、戦後初期の定時制にみられた強烈な学習意欲や高校生としての自負はみられない。しかし、生徒たちは総じて「傷ついた青少年」ではない。生徒たちの背後に中卒労働者を必要とする企業の要望があり、ある種の覇気を示す生徒も少なくない。既述のように4番の『風さわぐ野の花』は昼間二交代定時制高校の動向を伝えている。愛知県の定時制教師たちを執筆者とする同書には、同県下の昼間二交代定時制生徒たちの生活記録も掲載されている。それは多くの場合、自己省察に富み、ときに社会の差別に負けまいとする気概も認められる。

5番の『働き学ぶ生徒と教師』は、好んで定時制高校の教師になった著者の教育実践記録である。登場する生徒たちのなかには、中学時代の成績が悪くて定時制にしか進学できなかったという者もいる。「定時制に来る生徒は、日本の教育制度の中で差別・選別されてきた最底辺の生徒たちである」²⁴⁾とも記されている。それでも1970年代は、中小零細企業にとって中卒労働者がまだ「金の卵」の時代であった。雇用主の、定時制に通う労働者は「仕事もまかせられるし、将来、やはり伸びる」という話も紹介されている。また、全日制の卒業生の多くが地元に残らないなかで定時制の卒業生は地元に残ることが多く、「在学時代の問題児が、村の青年団の中に『果樹園経営』のサークルをつくり、父親たちから経営権をまかされ、共同作業や共同出荷で成功している例」²⁵⁾もあるという。そし

て著者は、全日制の高校が大学合格に力を入れてサラリーマンや官僚を養成するものになっているなかで、定時制こそが「落ちこぼれの教育」や「たくましい生活者を育成する、真の後期中等教育のあるべき姿」を追求できるとしている。

6番の『たにし学校』は、1960年代に昼間定時制分校の統廃合が進むなか、地域住民による分校存続運動の結果として1975年に開校された京都府立北桑田高校昼間定時制美山分校の実践を描いている。1975年時点で職業学科の昼間定時制分校が開校する例は珍しく、高校全入運動の一つのあり方として「定・通（独立）を復活させていく方向（京都・美山方式）」²⁶⁾を示す定時制として注目された。美山分校は農林業の後継者育成という地域の期待を担って設立されたのだが、入学してきた生徒がそのような気持ちをもっているわけではなかった。実際には経済面でも学力面でも補助・補充が必要な生徒が多かったのである。それでも教師たちは生徒たちが地域の課題に向き合うような実践を展開し、地域産業を担う卒業生が少なくないという成果を生みだしている。

以上3冊に登場する生徒たちは、教師たちの努力にもよるが、社会との接点を有しており、総じて定時制生徒としてのある種の気概が認められる。その点で、定時制高校の原型である「働きながら学ぶ」ことの人間形成上の可能性がうかがわれる。とはいえ、それはもはや盤石とはいいがたく、ある種の危うさを抱えている。7番の『当節定時制高校生事情』はそういった定時制高校生像を伝えている。19番の『蛍雪の学び舎・癒しの学び舎』の著者は、この書に共感をもったと書いている。1970年代後半から1980年代にかけての定時制高校は、「働きながら学ぶ」あるいは地元に貢献する人材育成という原型を残しつつも、それだけでは語れないものになってきていたのである。

8番の『未完の学校改革』は、生徒の多くが繊維産業で働く定時制の女子高で、生徒会活動を通して張りのある学校生活を実現しようと努力するが実現できずに終わったことを描いている。いわば旧来の定時制高校生像をめぐる生徒同士の攻防劇といってもよい内容で、定時制高校生像の転換を象徴している。

（3）現代社会の矛盾やひずみを反映する定時制高校

9番の『定時制高校青春の歌』以後、つまり1990年代半ば以後の書籍は、概して社会の底辺に浮遊する若者の姿を描いている。具体的には、中学校で不登校であった者や成績不振のため全日制の入学試験で不合格になった者、発達障害を有する者、貧困問題を抱える者、在日外国人等々である。全日制からはじかれた生徒たちが多数登場する。それは、現代の学校教育が能力主義を徹底させてきたことの反映であり、定時制が後期中等教育の最後の砦としての意味をもってきたことを伝えている。

そうした若者たちの実像を社会告発の傾向をもって伝えているのが30番の『若者たち』である。目次には「自分を傷つける若者たち」、「家庭が壊れている」、「暴力という生き方」

といった表題が並び、帯には「未来ナシ、希望ナシ、それでも自己責任かよ？」と、定時制の問題は社会問題であるという著者の思いが表わされている。定時制教師としての生活を含めて現代の定時制生徒たちの哀しくも素直な側面その他の実情を伝えているのが15番の『夜光の時計』である。これらの書籍から、養育できない親、学習障害等々、子どもの発達をめぐる現代社会の解決すべき課題の影響が、他の高校よりはるかに多く定時制高校に現れていることが知られる。『若者たち』の著者は、「あとがき」で定時制の問題は日本の教育の問題であるとして次のように述べている。

今回、夜間定時制高校という日本の教育システムの「辺境」を見つめることで、いままさに崩壊の危機にある、日本の教育の方向性を問い直してみたかった。

取材を通して、多くの若者たちの声にならない叫びを聞いてきた。彼らが絞り出す叫びは、屋台骨をシロアリに食われ、いままさに崩れ落ちようとしている、日本の社会の軋みそのもののような気がした。

こうした告発的な見解の一方に、高校生として勉強したいという、ある意味では素朴な定時制高校生自身の記録もある。13番の『僕が通った定時制高校』と17番の『立ち止まる勇気と駆け出す希望』は、ゆったりとしたペースで学習できる定時制高校の日常を描いており、そこにあるのは年長者も含む学習の場としての高校生活である。28番の『格差社会への高校現場の挑戦』は、学力育成や種々の表現力育成を目指した定時制高校の学校づくりの実践記録であり、現代の定時制高校の可能性を最大限に伸ばそうとしたものといえる。23番のコミック『一色高校定時制』も、多様な人材が通う定時制の心優しい雰囲気映し出している。

「オール1先生」として知られる宮本延春が定時制高校に入学したのは1993年、24歳のときである。30番の『オール1の落ちこぼれ、教師になる』には、定時制高校から大学に進学することがきわめて稀であり、教師たちの手厚いサポートによって国立大学進学を果たしたことが綴られている。その後、少子化の影響もあって、定時制高校から大学に進学することは決して困難ではなくなっている。

1990年代以後の定時制高校は文字通りセーフティ・ネットの役割を果たしてきている。小中学校の教育ではみ出された者を受け入れてきており、それゆえに問題点も多いが、傷ついた者に居場所を提供してきている。多様な人材が集まるがゆえに年長者も違和感なく学べるし、少数であれ年長者の存在が傷ついた者を癒してくれることもあろう。現代の定時制のこのような側面が、教師たちの努力なしにはありえないことはいうまでもない。

なお、現代の定時制を語るには、通信制や、技能連携制度の現代的あり方、定通併修などの実態も把握する必要がある。今後の課題である。

4. 現代の定時制高校からのメッセージ

(1) ボクシングで「アカンタレ」たちに挑んだ脇浜義明の教育論

兵庫県西宮市立西宮西高校定時制ボクシング部の存在を最初に世に知らしめたのは、TVドキュメント「ドキュメントα リターン・マッチ——夜間ボクシング部の夏」(関西テレビ、1988年8月20日放映)のようである。その後、後藤正治のドキュメント『リターンマッチ』(表の10番)が大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した。後藤は1990年春から同校に通い続けて、教師たちや生徒たち、卒業生に同行しながらこのドキュメントを仕上げた。ボクシング部創設者となり、指導にもあたっていた脇浜義明(1941-)が依頼を受けて教育論を展開するようになったのはその後である。脇浜の単行本としては、表11番の『ボクシングに賭ける』(1996年)と表14番の『教育困難校の可能性』(1999年)がある。

脇浜は教師としては特異な経歴をもつ。後藤の『リターンマッチ』によれば²⁷⁾、脇浜は神戸の下町で戦後日本の最底辺を生きた。家計を担うために屑鉄集めや新聞配達をこなし、小中学校は長期欠席で通した。不良少年の大将でもあった。1956年、母親から「穀つぶし」と、ののしられながら湊川高校定時制に入学。ここでボクシングをはじめた。その後、市立神戸外国語大学二部(定時制)に入学した。卒業後すぐに高校教員となり、小野高校(全日制)に4年間、龍野実業高校(定時制)に1年、母校の湊川高校(定時制)に3年間、そのうえで1972年に西宮西高校定時制に赴任してきたのだ。龍野実業高校勤務のころ、神戸大学大学院文学研究科修士課程に入学・在籍していた。英語力については定評があり、気に入った思想家の翻訳を組合新聞に載せることなどもしていた。

西宮西高校にボクシング部ができたのは1984年、脇浜が43歳、同校赴任12年目のときであった。在日韓国人の兄弟二人が要望してきたことが契機となった。部員たちは、皆一筋縄ではいかない経歴や思いをもっており、運営は容易でなかったが、脇浜自身がのめり込んでいったと後藤はいう。手づくりのサンドバックにはじまって、ついには10万円余りの費用で手製リングまで作り上げたというのである。そして指導は、厳しく、本気であった。

注目したいのは、彼のボクシング指導を支えるその発達観ないし青年観である。それは、かつては確実に存在したが、まさに今失われようとしている、虐げられているがゆえに否応なく身につけた、ある種の社会性や英知、強さ、優しさといったものを、現代社会の下積みにいる青年たちにもっていてほしいという願望に満ちている。

脇浜は組合活動にも熱心で、西宮西高校組合発行の『西西組合新聞』にエッセイを発表してきた。次は、1988年2月の同新聞に掲載した「ドン・キホーテの夢」と題した脇浜の一文である。

わるい通知簿を持って帰ってきても、親は笑っただけだった。学校の成績では金持ちに勝てないことをよく知っていたし、その点で子どもに勝負させる気もなかったのだろう。それに、どうせすぐ世の中に出て働いて家計を助けねばならないのだ

から、上の学校に行くような良い成績は不要だった。しかし、ケンカに負けて帰ってきたときは、怒った。もう一度出かけてなぐり合ってくるまでは家に入れてくれなかった。だから貧乏人の子は成績は悪いがケンカに強いというのが通り相場だった。なけなしの誇りだった。

いつの頃からか貧乏人の子がケンカに弱くなった。そのうえ怠け者で、横着で、金持ちのように不人情になった。「アカンタレがほんまにアカンタレになりよった」と古老がなげく。京大がアメフトに優勝したのは象徴的だ。唯一の誇りであった肉体と腕力からも疎外されたら、ほくらには一体何が残るというのだ。肉体と腕力のうえに、貧しい人たちのやさしさがあったのだ。ゴンタクレが消えるときやさしさも失われていく²⁸⁾。

脇浜は定時制を「矛盾の犠牲者の吹きだまり」として、学力面、家庭面、経済面、さらに現代社会の差別構造により痛めつけられた青年たちが助けを求めてやってきている情況を描いている。その青年たちに学校的・中産階級的な知の体系を平等の名のもとに供給することの非を主張する。脇浜はこうもいう。「所得の平等化のアナロジーで、あのつまらない学校の勉強を底辺の子にも平等に供給するのが、差別と闘う教育だと思っている」。「そういうところから私のところへやってきた部落出身生徒は、たいてい覇気がなく、ひ弱で、依存心ばかり強い子どもたちであった。牙をもぎ取られたドロップアウトたちである」。「一度設定された知の基準は、それを持たない者を排除する機能を発揮する。それは制度的な暴力である。この暴力によって排除された者は、まったく無力で、悲惨な人生へと追いやられる」。「何より恐ろしいのは、高校入試の受験的知識を理想的規範とする価値観の一元化を子どもの心の中に植え付ける効果があることだ。一元的な価値尺度の下の方に位置する自分へのマイナス・イメージをますます発展させることになる」²⁹⁾。

生活綴方の創始者、小砂丘忠義の「原始子供」³⁰⁾になぞらえて、脇浜の熱意を支える青年像を「原始青年」といってよいのではないだろうか。「原始青年」は内に「牙」をもっている。学校化社会の浸透はこの「牙」をもぎ取り、無力であると思い知らせ続けて、本物の無力者にしていくというのである。この「牙」は、日本における底辺層の文化といってもいいものである。この文化は、戦後日本の底辺層を生き、さらに「働きながら学ぶ」定時制高校の原型を身をもって知り、そしておそらく望んで定時制の教師となった脇浜ゆえに見出されたといえよう³¹⁾。

1970年代後半に広がった到達目標・評価論にしても、2000年を迎えたころから文部科学省によって推奨された「目標に準拠した評価」にしても、基本的には「一度設定された知の基準」、具体的には学習指導要領の各教科の内容とその応用を前提としている。もとより個々の実践では、教材開発その他種々の工夫がなされてきており、学習指導要領の枠にとどまらない知の世界が切り開かれてきてはいる。それでも、脇浜のいう「牙」＝底辺層

の文化への着目は、学校教育のなかでは不十分なままである。脇浜は、この文化の存続をボクシングという格闘技を通して真正面から求め、かつ表舞台に引き出そうとしたのである。

（２）短歌で描く勤労青年の泣き笑い

社会の底辺層の世界を短歌という形で生徒たちに語らせていったのが、南悟（1946－）の短歌指導の実践である。南も脇浜と同じく兵庫県生まれで、日本大学文理学部国文学科卒業後、尼崎市福祉事務所のケースワーカーを3年勤め、1974年から県立高校の教員になった。兵庫工業高校に5年勤務したうえで神戸工業高校定時制に1974年から勤務し続けた。短歌指導の実践はこの神戸工業高校定時制でのものである。南によれば、阪神・淡路大震災により引き起こされた家庭崩壊や生活困難を背景に、子どもたちの学校不適応や荒れは深刻だが、「不思議なことには、定時制高校では暴力事件もいじめ事件も余りなく、私の勤める学校では、ここ数年来、皆無なの」だという。「定時制高校には何か不思議な秘密のようなものが隠されているようです」、「定時制高校は、人間再生の場です。たとえ、どのような失敗や挫折や障害があるにせよ、それが癒され、人として生きる力が与えられる不思議な学校なのです」ともいう³²⁾。

多くを語らず、南が指導した「生徒短歌集」の一部をあげよう³³⁾。

かけつける友の住まいは崩れおり生き埋めの友にわれは無力
ニッカポッカみながはいているからかっこいい風ひらひらと学校へくる
震災後十八ヶ月でわが家建ち町並み変わり淋しく暮らす
やくざやめ悪事もやめて二十二歳遠まわりして今夜学生
おちこぼれ心磨きに学校へ獅子の舞いにてつかみしものあり

自分の生活を表現する点は、生活綴方ないし生活記録と同様である。ただし、これらには、短歌という洗練された形で生活が語られている。生徒たちは、生活綴方のように、リアルに、ときに赤裸々に自分の生活を綴るのではなく、そうした生活を短い表現に凝縮する作業を伴って表現している。南は「自分の感情や生活の事実を、五七五七七の『定形』に集中させることで、一つの表現が生み出され、自分を客観的に見る喜びが見つけ出されるのでしょう」と書いている。南の短歌指導の直接的な契機は、1987年、教科書にあった次の「無名の働く人々の歌」に生徒たちが「仕事の歌なら詠めるなあ」と、共感を寄せたことだったという。

ラジオ講座学ぶ女子工に夜警所の机ゆずりて巡視に立てり 仁田脇三穂

この頃ヒットした俵万智の短歌集『サラダ記念日』の短歌20首ほどを教材にしたところ、「かっこうよすぎる」、「現実味がない」、「生活のにおいがしない」と、生徒たちには不評だったという³⁴⁾。表現のうえでは俵万智の現代短歌の方がわかりやすかったと思われるが、生徒たちには「無名者の歌」の方が、共感できて創作意欲をそそるものとなったのである。

共感、つまり情意的要素がとくに青年期の教育において重要であることを示唆している。

南の勤務する定時制が「人間再生の場」たりえているのは、南一人の力ではなく教職員の何らかの共同体制によるとは思われる。南は「短歌を詠んだ生徒たちの生き方は、そこに心休まる暖かいクラスがあって、また親しく語り合える仲間がいてこそ、学校に通い続けることができるのだ」³⁵⁾とも書いている。こうした仲間づくりを前提にしている点も生活綴方に共通する。

南の勤務する神戸工業高校定時制も、脇浜と同様に在日韓国・朝鮮人問題、被差別部落問題、一人親家族・極度の貧困問題等々を抱えた生徒たちが少なくなく、それらは、ときに生徒たちには抱えきれない重みをもつ。ある男子生徒が、友人に語ったという。「母が差別と貧困の中で亡くなったこと、読み書きのできない母と自分たち家族を見捨てた父を恨み荒れてきたこと、そして、彼女の支えと定時制高校の中で立ち直れ、自分の苦勞も部落差別に起因するを知ったことで、父母をいとしく思えるようになった」と。その生徒は「本当の勉強というのは、お母ちゃんにしわが増えたなあ、苦勞してるんやなあ、お父ちゃんの白髪が目立つけど、仕事大変なんやなあと思えるようになることやと思う。ここまで来れた皆で卒業しよう。死んでもいいと思っていたけど、生きてることはいいことや」と、結んだ³⁶⁾。

(3) 行事指導に力点を置いた学校づくりの実践

埼玉県立浦和商業高校定時制（浦商定時制）については、雑誌『教育』等でも取り上げられており³⁷⁾、四者協議会による学校づくり実践を展開した学校として知られ、そのカリキュラムが注目されてもいる。四者とは、生徒、卒業生、保護者、教職員である。小論では、この学校づくり実践の直接的な契機となった、生徒がつくる卒業式が成立した経緯と、授業と行事を一体化したカリキュラムを取り上げることにとどめたい。

1989年に長い臨時教員生活ののち新任として浦商定時制に赴任した教師によると、この当時はまだ、生徒たちは「働きながら学ぶ」というバイタリティを強く持っており、「昼間の労働の厳しい労働の後で学校に駆けつける姿は私たち教職員に感動を与え、彼ら自身もかなり自負を持っていた」という³⁸⁾。しかし、しだいに「怠学、暴力、暴走行為、器物破損、恐喝などの問題」への対応・処分に頭を悩ませるようになっていった。そして1993年の秋、体育祭のときに事件が生じた。体育祭を運営していた実行委員の生徒と、器物破損により家庭謹慎を繰り返していた生徒との間にトラブルが起きて、謹慎生徒に加勢した生徒たちが「体育祭のために作られた看板を壊したり、校長室の窓ガラスを割ったりした」のである。そして、体育祭でのクラス発表を予定して練習を重ねてきた和太鼓演奏ができなくなった。2学期も終わりに近づいたころ、そのクラスから和太鼓演奏発表の希望が出されて、生徒が卒業式を運営することにつながっていったのだった。この間の経緯を、浦

商定時制の元教師がこう書いている。

この太鼓の件から、私たち教員集団は生徒が主人公の卒業式に取り組むことになった。「卒業式の運営を生徒たちの手に委ねてみてはどうだろう。」卒業生の動きと並行して在校生の卒業式実行委員会が発足した。式の流れ、司会、音響、照明に至る全体の運営を実行委員の生徒たちが取り仕切るようになった。

卒業生たちの動きはというと、A組は在校生に向けたメッセージと合唱、B組が和太鼓の演奏を行なうことになった。この取り組みを最後に卒業するという思いもあったのか、四年生たちは積極的に動き始めた。A組の生徒たちはメッセージ係、合唱指導係、BGM係、司会などを決め、班ごとに動き始めた。B組は、練習を通して、すでに自治の世界を築いていた。練習日や太鼓の貸し借り、練習に来られない人への対応、さらに、演奏の編曲まですべて自分たちの力でやり始めていたのである。そこに教員の入り込む余地はなかった³⁹⁾。

その後、生徒たちは新入生歓迎会、全校遠足、芸術鑑賞会、卒業生を送る会など、実行委員会を立ち上げて次々と行事をつくりだしていったという。

1995年、校内に教育課程編成委員会ができた。授業を根本から変えようとしたのである。教師の一人、平野和弘によれば⁴⁰⁾、この委員会で生徒たちについて様々な角度から話され、「家庭での生徒たち」、「教師から見た生徒たちの現実生活」、「生徒と生徒の関係」、「生徒と学校」など「構造的な生徒の把握」がなされ、生徒たちを肯定的にみられるようになっていったという。そうして、それぞれの教師たちが「この学校の生徒に四年間でどんな力をつけたいか」を議論していった。その過程で「生徒の居場所」が重要なキーワードとなり、「学校内の様々な場所を生徒に開放することになった」。職員室はその筆頭に位置づいていった。

授業検討の最初の対象となったのは総合的な学習の時間だった。1999年、平野学級の総合学習を「沖縄修学旅行を着地点とする」平和学習とすることを、実験的に行った。翌2000年度に全校的な総合学習の実験的实践に移った。テーマとキーワードは、1学年は「信頼」（自分をあらわす・身体性）、第2学年は「信頼」（学びへのきざし）、3学年は「学び」（自らの学び）、第4学年が「平和」（卒業までの総まとめ）であった。そうした経緯を経て、学校が「生徒につけたい力」を次の「八つの力」とした⁴¹⁾。各教科の指導内容はここに含まれるようになっている。

- 1、自分を表現する力
- 2、他者認識と自己認識ができる力
- 3、主権者として活動できる力
- 4、労働をするための主体者像を確立できる力
- 5、生活主体者としての力

- 6、文化を享受できる力
- 7、「世界」を読みとる力
- 8、真理を探究する力

これらを各教科で取り扱うにあたっては、「1、自分を表現する力」であれば、「言語化できる力」、「身体化できる力」、「芸術で表現できる力」に分けて、それぞれについて各教科で何ができるかを考察する。たとえば「言語化できる力」は、次のようにして教材化を考案していく⁴²⁾。

国 語：自分の辞書をつくる／聞き書きを紙芝居に仕立てる

世界史：自分史を書く

英 語：身の回りのこと・社会的な関心を簡潔な英文で表現する。

保 健：資料を基に自分の意見をまとめ、人の意見を聞き、また、自分の意見をまとめる。その繰り返しの先に自分の言葉を探る力を培うことになる。

5. 教育目標と評価をめぐる課題

最後に、学校教育全体からみればマイナーな部分であっても、現代の学校教育の矛盾を反映する場である定時制高校の現実と工夫をこらした教育実践から、教育目標論や評価論に対してどのようなことがいえるかを検討しよう。

第一には、脇浜義明の主張する青年観と底辺層あるいは労働者文化を組み込む教育内容の構想も必要ではないか、ということである。脇浜のボクシング指導はもとより南悟の短歌指導もその一つといえる。浦商定時制の和太鼓にしても、これが民衆文化に連動するものであることを考えると、こうした文化に連なるものといえよう。浦商定時制の教育課程自主編成も、こうした視点を組み込んでいるように思われる。そうでなくとも、生徒自身ももってきている文化に即して自己表現できるような工夫が施されている。

第二には、教科外活動の重要性である。学校教育の基本は国民教養の最低必要量を子どもや青年にわち伝えることである。しかし、浦商定時制の実践に象徴的に現れているように、その基本線からはずれてしまった子どもや青年たちが、生徒会や部活動等の教科外活動を介して学ぶことに意欲的になるという現実をどうとらえたらいいのか。脇浜のボクシング指導は教科外活動に軸足を置くものであった。「ゆとり教育」の終焉と「確かな学力」の推奨のなかで教科外活動は削減される傾向にあるが、それが新たな「落ちこぼれ」を生み出さないとも限らない。教科外活動の発達上および教育課程上の位置づけ、その目標論と評価論等をつきつめていくことが必要である。

第三に、働きながら学ぶことの可能性を追求していくことも必要だろう。日本社会の経済成長とともに働きながら学ぶ高校生はどんどんマイナーなところに追いやられてきた。定時制生徒の多くが働いているが、アルバイトが多い。その点で、かつての1960年代当時

のフルタイム労働者であった定時制生徒の労働とは質が異なる。しかし、アルバイトであれ、労働であり、するとしないとでは保護者からの自立の度合いも違ってくる。また、大学生に目を転じれば、アルバイトは日常的な姿である。生徒・学生の労働を致し方なくするものととらえるのではなく、労働しているがゆえにみえてくる世界を積極的に教育に取り入れる努力があってもいいのではないか。それは、労働をめぐる社会的・経済的事情を踏まえて、労働する自分を客観的にとらえることを促していくと思われる。

第四に、教育内容を生活とかかわらせる努力もまた必要だということである。教育と生活の結合という古くからの課題がある。この課題は現代においてはどのような様相をもつのか。浦商定時制の自主編成カリキュラムの内容をみると、結婚問題や現代の国際社会事情など、時事的なことがらや身近な問題を多分に含むものとなっている。進学よりもこれから社会に出ることを前提とした教育内容で、社会的自立を促すものとなっている。その点は、兵庫県立長田商業高校定時制の実践⁴³⁾（表の28番）でも意識的に追求されている。

第五はこの第四の課題から導かれるもので、習熟概念の再検討が必要だということである。習熟のとらえ方にはいくつかあるようだが、ここで問題にしたいのは、到達度評価論のなかで中内敏夫によって提起された知的一元論としての習熟理論である⁴⁴⁾。この理論は、学習には基本性段階と発展性段階とがあり、関心・意欲・態度といった情意的な方向目標は発展性段階で追求されるもの、とする。この発展性段階が習熟である、という理論なのである。果たしてそうか。少なくとも基本性段階について、もっと丁寧にとらえることが必要である。発達段階による違いもあるだろうが、南の短歌指導に象徴的にみられるように、また浦商定時制のカリキュラム改革にもみられるように、生徒たちは興味や関心をもつものには学習意欲を示す。つまり、基本性段階から積極的に生活との関連性や情意的要素を取り込むことにより理解が深まるのである。だから基本性段階から習熟を目指すというのではない。基本性段階で情意的要素と認知的要素の結びつきや関連性を積極的に追求する教材や指導法を追求することで、認知的な世界と結びついたより深い生活認識、自己認識を得る。そうしたところに開かれるのが習熟なのではないか。この構想は、のちに中内が、基本性段階において認知的要素と情意的要素を伴って発展性段階に至るとした学力モデル論とも通底すると考える⁴⁵⁾。

定時制高校の生徒たちや教師たちの様々な言葉に目を向けることでみえてくる世界は、「働きながら学ぶ」という定時制高校の原型を引き継ぎつつも、いろんな事情から、教育を受ける権利という日本国憲法で保障されているはずのものがいないがしろにされている現実でもある。ここでの学び直しは、小中学校の教育内容を、補充学習によって習得することで果たされるというような単純なものではない。生徒たちは、本人が気づこうが気づくまいが、「生活という重い鎖」⁴⁶⁾を抱え、ときにそれに打ち拉がれている。定時制高校の教師たちがこの現実と格闘しながらそれぞれ独自に開拓してきたのは、多くの場合、方

法は異なるが、この「生活」を解きほぐし、「生きる力」に転化することだったのではないだろうか。それは一筋縄ではいかないし、努力が報われないことも少なくなかったろう。小論は、そうした教師たちの営みから、教育の目標や評価の課題をとらえ直すことを試みた。その結果、子どもや青年の「生活」に教育がいかに切り込めるか、というテーマの重要性を再確認することになった。

註

- 1) 片岡栄美「学校世界とスティグマー定時制高校における社会的サポートと学校生活への意味付与」 関東学院大学人文科学研究所『人文科学研究所報』第17号、1993年。
- 2) 『戦後日本教育資料集成』第二巻、三一書房、1983年、41頁。
- 3) 板橋文夫・板橋孝幸『勤労青少年教育の終焉』随想舎、2007年、225頁。
- 4) 前掲(3) 162～164頁。
- 5) 尾形利夫・長田三男『夜間中学・定時制高校の研究』校倉書房、1967年、前掲(3) など。
- 6) 山岸治男『農村における後期中等教育の展開』学術出版会、2009年、49頁。
- 7) 戦後初期の農家二三男問題については加瀬俊彦『集団就職の時代』青木書店、1997年、参照。
- 8) 尾形利夫ら前掲書(5) 172頁、より再引。
- 9) 文部省調査局統計課『日本の教育統計』1966年、128～129頁。
- 10) 赤坂康雄『戦後教育改革と地域一京都府におけるその展開過程』風間書房、1981年、参照。定時制分校に対する市町村側の維持に向けての熱心さについては、小林千枝子「地域の学校づくり一京都府立北桑田高校昼間定時制美山分校の成立と地元定着指導実践一」橋本紀子ほか編『青年の社会的自立と教育』2011年、大月書店、が一事例をもとに描いている。
- 11) 昼間定時制分校の実際については、山岸前掲書(6)、および片岡栄美「戦後社会変動と定時制高校一都市型および農村型定時制高校の変容の比較一」関東学院大学文学部人文学会『関東学院大学文学部紀要』第68号、1993年、に詳しい。
- 12) 詳細は小林千枝子「昼間二交代定時制高校を生きた少女たち」『作新学院大学紀要』第17号、2007年、同「昼間二交代定時制を生きた少女たち」橋本紀子ほか編『青年の社会的自立と教育』2011年、大月書店、参照。
- 13) 片岡栄美「戦後社会変動と定時制高校」『関東学院大学文学部紀要』第68号、1993年。
- 14) 飯田浩之「新制高等学校の理念と実際」『高等学校の社会史』東信堂、1992年、参照。
- 15) 橋本三郎「高校多様化による選別」全国進路指導研究会編『選別の教育』民衆社、1971年。
- 16) 『全国定通教育三十周年記念誌』1977年、39～42頁。
- 17) 愛知県高等学校教職員組合定通部「多様化の先鋒をはたす連携教育」『愛知の高校 定時制・通信制 教育白書』1970年、12～14頁。
- 18) 板橋ら前掲書(3) 187～193頁。
- 19) 文部省『我が国の教育水準(昭和五五年度)』1981年、付51頁。
- 20) 片岡栄美「教育機会の拡大と定時制高校の変容」『社会学研究』第38集、1983年。
- 21) 愛知県高等学校教職員組合定通部『愛知の定通教育』1987年。
- 22) 宮村堅弥『霧は晴れたり』1957年、洋々社、346頁。
- 23) 江面幸子『私一定時制女子高校生の手記』学風社、1960年、97～98頁。
- 24) 首藤隆司『働き学ぶ生徒と教師』明治図書、1981年、181頁。
- 25) 前掲(24) 192頁。
- 26) 小川利夫『青年期教育の思想と構造』勁草書房、1978年、192頁。
- 27) 後藤正治『リターン・マッチ』文芸文庫、2001年、25～38頁。
- 28) 脇浜義明『ボクシングに賭ける』岩波書店、1996年、77～80頁。
- 29) 脇浜義明『教育困難校の可能性』岩波書店、1999年。

- 30) 中内敏夫『生活綴方成立史研究』明治図書、1970年、513～548頁、参照。
- 31) 脇浜が自ら経験し注目した文化は、ポール・ウィリス著『ハマータウンの野郎ども—学校への反抗・労働への順応』（熊沢誠訳、筑摩書房、1985年）に描かれたイギリスの労働者固有の文化に連動するものと思われる。
- 32) 南悟『ニッカボッカの歌』解放出版社、2000年、3頁。
- 33) 前掲（32）25～44頁。
- 34) 南悟『定時制高校青春の歌』岩波ブックレット、1994年、4～5頁。
- 35) 前掲（34）6頁。
- 36) 前掲（32）144頁。
- 37) 『教育』2008年6月号の「特集Ⅰ現代の高校生と高校教育」、太田直子「定時制の若者たちとつきあって」『教育』2010年12月号、など。
- 38) 浦和商業高校定時制四者協議会『この学校がオレを変えた』ふきのとう書房、2004年、77頁。
- 39) 前掲（38）81頁。
- 40) 前掲（38）87～93頁。
- 41) 前掲（38）154頁。
- 42) 前掲（38）155頁。
- 43) 兵庫県立長田商業高校創立80周年記念事業実行委員会『格差社会への高校現場の挑戦』学事出版、2009年、参照。
- 44) 中内敏夫「学力のモデルをどうつくるか」『教育』1967年7月号、9～10月号、同「教育の目標・評価論の課題」『教育』1977年7月号、同『指導過程と学習形態の理論』明治図書、1985年、など参照。
- 45) 中内敏夫「習熟についての考案」『教育目標・評価学会紀要』第2号、1992年、小林千枝子「習熟の内実」『教育』2004年6月号、参照。
- 46) 中内敏夫『指導過程と学習形態の理論』明治図書、1985年、10頁。

付記 1

小論での研究は学術研究助成基金を受けて進めている研究「高等学校定時制・通信制課程の社会史研究—戦後日本の青年の生き方に関する一考察—」の一部である。

付記 2

小論執筆後、井上とし著『鐘紡長浜高等学校の青春』（ドメス出版、2012年）を読んだ。同書は1949年から1988年まで続いた鐘淵紡績株式会社の長浜工場内に付設された企業内高校の成立とその後の経緯を描いている。著者は同校の教師であった。小論はこうした企業内高校の動向は取り上げていない。しかし、戦後初期から高度成長期にかけての勤労青少年の学校体験を把握するには、こうした企業内高校についても追究していくことが不可欠である。